
生命の果てに

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生命の果てに

【Zコード】

Z0585Y

【作者名】

江角 稔

【あらすじ】

主人公が入院した病院で、運命的な出会いを果たすお話。…やつくり言えばこんな感じ。

登場人物（予定）

リーシャ 脳腫瘍で入院した少年。
エレーナ リーシャと同室の少女。生れつき心臓を患う。
医師 主治医。
ローザ 看護士。

その他Hレーナの友達がちよじつと出て来る可能性あり。

夏休みと同時に（前書き）

突然ですが、ラブコメ（？）です。

きっと秋だからですね。
うん、きっとそうだ。

夏休みと同時に

もうこれ以上、私に悲劇を見せないで…

僕は今まで普通の生活をして來た。この十七年間で色々なことを見て、沢山の人にお会つて。

僕は全てを知った氣でいたんだ。僕の全てを失つまでは。そして、君にお会つまでは。

僕は突然頭痛で倒れた。

夏休みの始まりと同時に、である。

病院で検査をしたら脳腫瘍が見つかった。

僕は緊急入院となつた。

何故だ。

僕はこれからもっと勉強をして働きたいのに。愛してくれる家族や友人がいるのに。

何故だ。一体僕が何をしたと言つのだ？

リーシャは心の中で叫んだ。

辛かつた。苦しかつた。

そして何より、怒りと哀しみが込み上げてくるのを抑えきれなかつた。

ああ、きっと僕は世界で一番不幸な人間なんだろうな…その時僕はその事実を疑わなかつた。

だが僕はすぐに、それが間違いだと実感する。

僕は病室に通された。一人分のベッドが空いていたが、それ以外は至つて普通の子供部屋だった。

相部屋の患者はきっと老人か老婆だろう、と最初は思つたが、よく考えてみればここは…子供部屋なんだよな。と言つことは子供しか居ないんだよな。と言つた俺も子供扱いされてるんだよな。

僕、十七歳なのに。

ローザと云つ名の看護士さんは言つた。「隣の子はまだ十五歳の女の子なの。生まれつき心臓を病んでいてね。だから友達になつてあげて」

驚いた。世の中には生まれてから一度も病院の外へ出たことがない人もいるのだ。

僕はきっとすぐに退院するだろう。でもその人はもしかしたら、一生病院から出られないかもしない。そう思うと、その子がとても可哀相に思えた。

しばらくして彼女は病室へやつて來た。どうやら検査を終えた後らしい。

幼い顔立ちだが、凜とした碧眼と金色に輝く髪はどことなく大人っぽい。彼女は本当に、僕よりも年下なのだろうか。

「今日から同室のリーシャ君よ。仲良くしてね」とローザさん。

「…はあい」と、彼女の氣のない声。

大人げなのは声も同じ。だがそんな態度ではいくら面倒見の良い僕でも、あまり良い気がしない。

しかしローザさんは「じゃあ私は仕事に戻るけど、何かあつたらすぐ呼んでね」と言つて、すぐ出て行つてしまつた。

沈黙。

看護士さん、できれば今すぐこの気まずい空気を何とかして…と呼び止めたかったが、そこまで僕は我が儘ではない。

「ねえ」彼女が話し掛けて来た。「何?」「せつまくローザに見とれてたでしょ」…こきなり何を言い出すんだ。

「別に…そんなつもりは無いけど?」「そう?でも隠す必要は無いわ。彼女はこの病院内で一番の美人だから。私も彼女にだけは心を許せるんだ…本当に、綺麗だよね」

そうなのか。しかし彼女がいくら綺麗でも、僕が本当に見とれているのはローザじゃなくて君の方なのだが…とはさすがに言えまい。彼女の性格からして”機嫌をとううつたつて駄目よー”とか言われそうだし。

「君の名前は何て言つの?」答えたなど返つて来ないだらうと思ひながらも、一応尋ねてみた。

「…エレーナ」

おお、返事をした。こんな些細なことでも、感動してしまう僕。一体、どうしたのだろう。病氣で頭がイカれたのかな…確かに今は、脳腫瘍で入院中なのが。

彼女はあまり素直そうな態度をとらない。だから彼女の冷たい感情が、僕に直にぶつかる。

「そう。エレーナちゃんか、覚えたよ。僕は…」「リーシャでしょ。さつき聞いたから」と愛想のない言葉で遮つた。その態度にむつとしながらも、僕は言葉を続ける。

「そうだよ…もしかして君は、人見知りなのかい?」多少嫌みがこもった言い方に、僕は後悔した。と言つても、僕にそんな気はなかつたのだが。

「…どうして?」「あまり人と関わろうとしないからさ。例えば、

他の看護師さんとか

「別に。私のことを病人扱いして距離を置く大人が嫌いなだけよ。でもローザはそんなことをしない。だからよく話せるの」「そつか……何だか、納得出来るような出来ないような。

「でも僕はまだ子供だ。だから僕には普通に接してくれるだろう?」「どうかしら?私は別に貴方と仲良くしたいとは思わないわ」力チン、と来たが、引き下がる訳にもいかない。……あれ?どうして僕は、こんなにも必死なのだろう。

「でも僕は、君と仲良くしたい」「どうして?」「同室の子と話さないなんて、つまらないからさ」「…変な理屈」一蹴された。でも負けない。「でも僕は、いつもそうしてきた。だから君とも仲良くしたいんだよ。それに、友達になることに理由なんて要らないだろう?」

彼女はしばらく考えてから言つた。「…分かった。じゃあようしぐね」

その日を境に、僕達はいつも一緒にいた。互いに今までの生活の話をしたり、本を読んだり。

ある日僕が医療の本を出すとエレーナは言った。

「私ね、病気が治つたら科学者になりたいの。今まで沢山の人が死んでいくのを見てきた。でもお医者さんが治してあげられないのは、薬がないからなの。そんな可哀相な人を、私が作った薬で世界中からなくしたいんだ」

それはいくら何でも無理だろう。全ての人間が死ななかつたら道理に合わない。地球はたちまち人間で溢れ返り、食糧飢餓など、他の問題も出てしまう。

そして何よりも、僕の考えは彼女のそれと相反していた。

誰かが生きているから、誰かが生まれる。

誰かが死ぬから、誰かが助かる。

僕はそう考えていた。全ての人間が助かるなど、ありえない。

しかし僕は、彼女の夢を壊すようなことをしてはいけないと思った。

「きっと叶うよ。君なら出来るさ」 「本当?」

彼女はキラキラとした目で僕を見つめた。僕は、彼女に、吸い込まれそうになる。

「ああ、信じてる。僕もエレーナの夢を手伝いたいな」「ありがとうございます。ねえ、リーシャの夢って何?」

「え...」

言葉に、詰まつた。

僕の、夢?

必死に思い出そうとする。

ええっと、昔、作文で書いたのは...。

「僕?...僕は、翻訳家になりたいんだ。医学や文化の発達が大きな国の書物を、この国の子供達に読んで貰いたい。そして国の人材を役立てて欲しいんだ」 うん、確かにこんな感じだった気がするな。多分。

この言葉なら、気休め程度にはなる。エレーナが生きながらえることが出来るかもしれないという、希望的空論を夢見ることには。

「そつか...じゃあ私の研究資料を世界中に発表する時も、リーシャに翻訳を頼むね!」 「...良いよ

僕は叶うはずのない約束をした。僕はともかく、彼女の心臓は決して治らない病気なのだ。

：神様は不公平だ。全ての人間に、同じチャンスを与えてはくれないのだから…

冬休みを目前にして

季節は巡り巡つて行き、僕が入院して早四ヶ月半。もう十一月の寒さが部屋の外には広がっている。

しかし病室の僕達にはあまり関係ない。風邪をこじらせて体に負担をかけないように、いつも部屋には暖房がかかっていたからだ。

こんな病院生活が長く続き、時間が過ぎて行く中、僕はエレーナに惹かれていた。考えるのはいつもエレーナのことばかり。彼女の笑顔はいつだって、僕の渴いた心を潤してくれる。僕は心から彼女を愛するようになつた。

彼女の、とても叶いそうにない夢でさえも全て。

だが、もしかしたらそれは、家族や今まで仲の良かつた友人が急によそよそしくなったことに対する淋しさから来たものなのかも知れない。だからこそ、この想いを彼女に伝えるべきかどうかで悩んでいた。僕はその想いが愛情なのかどうか、確かめる術を持たなかつたから。

「どうしたの?」ある日、よろけた僕に心配そうにエレーナが声をかけた。「具合悪い?」

その頃にはもう、彼女は僕と普通に接するようになつていた。多分、僕のことを信じてくれているのだろう。もしくは、本当に僕を子供扱いしているのだろうか?

「だ、大丈夫。大したこと、ないよ」僕は途切れ途切れに言つた。最近の僕はどうもおかしい。頭がぐらぐらする。…うん、きっと、彼女のせいだ。

もう、駄目だ… 我慢出来ない。

僕は、エレーナを愛しておきながら… 彼女と今まで通り、普通の友人みたいに接するなんて、出来ないよ。

「…エレーナ」

僕は想いを告げる覚悟を決めた。もし此処で今振られても、悔いはない。僕はどうせ退院出来る。そうすればすぐには無理でも、彼女のことを忘れられるだろうから。

…しかし、何と言えば良いのだろう?

「…君のこと、好きになつたみたいなんだ。勝手に斤想いしても良いかな?」

やつと声となつて出てきた言葉。しかしこれでは、はつきりと自分を伝え切れてないのではないか?

違う、僕の想いはこんな、曖昧な物なんかじゃない。なのに…まだ、伝え切れていない。一体、どうすれば良い?

気付いたら、抱き締めていた。

…勿論、離したくはなかつた。

言葉に出来ないから、
言葉に出来ないなら、
こうするしかないんだ。

僕の言葉で驚きに見開かれた青い瞳。そして彼女は「駄目」と言つた。

やつぱりな。だって僕達は仲の良い兄妹みたいで、恋人同士になどなれないのだから。

「駄目。だって…片想いじゃないもん。リーシャ、私も貴方が好き

突然の彼女の告白に、僕は夢を見ているのかと思った。
そして本当に夢、ではなかつた。僕の想いが通じただけでなく、
彼女も同じように僕のことを持つてくれていたのだ。

今こつして突き付けられた現実を、素直に飲み込めない。そんな僕
を見て彼女は笑つた。

だが奇跡って言葉を使おうとして、止めた。
もしもこれを奇跡と呼んでしまつたら、彼女が助かると言つ奇跡が
無くなつてしまつかもしれないから。

ただ、そんな気がしただけ。

その年のクリスマス・イヴにエレーナが僕に話してくれた。「私の
心臓、手術で治るんだって」

「本当?」驚いた。彼女はもつ、治ることはないと思つていたから
だ。病院を出ることも…。

「うん、今ドナーが現れるのを待つてるんだ」「良かつた…」僕は
安心した。しかし僕とは正反対に浮かない顔のエレーナ。
「でも、ドナーってことは誰かが死んじゃうんでしょ?」「そうだ
よ。でも必ず、全ての人間が助かるなんてありえないことなんだ。
そんなの、理想郷でしかないよ」

「そう…」落ち込む彼女に僕は必死でフォローした。「だから君が
これから頑張つて、沢山の人を助ければ良いだろう?」「そうね…
でも私、そこまでして生きたくないよ。誰かが死ぬのなら、私が代
わりに死んであげたい」

冷たさを感じる声。どうして僕よりも幼いはずの彼女が、こんなに
も大きな闇を抱えているのだ?

「駄目だ！君は何があつても生きなきゃいけない。君は病院の外の世界を知らないんだから。それなら僕が、君の代わりに死んであげる。僕は君無しでは生きていけないんだよ…」

そう言って僕は彼女を抱き締めた。彼女を、エレーナを失いたくなかった。絶対にこの腕を離さないと、絶対に彼女を守るんだ、と神に誓つリーキャだつた。

それから2人は仲睦まじい恋人同士となつた。周りが羨ましがる程、2人は幸せな日々を送つた。

暖かい人々の心。それに触れて、僕は家族から切り離された哀しみを癒していった。それはきっとエレーナも同じだらう。

僕等は永遠に、傍に居たいと願つていていた。叶わないと分かっていても、叶えたかつた。

そして彼等が付き合い出して一年後、一人は結婚した。囁かでも、美しい結婚式を挙げて。

皆は、こんな時間が当たり前のように永遠にあるものだと感じていた。しかし、

別れは突然に

僕は今まで、生きてこり」とは当たり前のようには想っていた。だが彼女と出会つてから、それが間違つていていたことに気が付いた。

彼女が教えてくれたんだ。明日が来ることの素晴らしいことを。命が続くことの重さや大きさを。

今僕はそれを幸せだと思って生きている。それを教えてくれた彼女なら、僕は何だってやってやる…。

今僕の意思是予想以上に現実や常識を離れていく。
彼女のためなら命を差し出したって良い。

僕が入院して一年半が過ぎた頃。そう、新婚生活とも言つべき病院生活にも馴染んだ頃。

悲劇は突然にやつて來た…訳ではない。きつと音もたてずにあいづらは、僕の頭を、あるいは心を食い尽くしてきたのだびつ。僕がそれに気付かなかつただけで。

ある日僕は主治医に呼ばれて診察室へ行つた。

ああ、きっともうすぐ治るから退院の準備をしきだの何だのって話をされるんだろうな。エレーナは淋しいなんて言うのかな。

最期まで、傍に居てあげたいな　　彼女が息を引き取る時まで。

でも、もしも…いつか彼女にドナーが現れて、手術をしたら一人で幸せに暮らそつか…安易な考え方しか浮かばない僕に冷たく突き刺さつた一言。

「君はもう助からないのだよ」「うう

え…？僕は耳を疑つた。

僕が、死ぬ？

「ちょっと…待つて下さい…どうしてですか！？」

僕は治るんじゃないんですか！？」
納得がいかなかつた。〔冗談じやない。

僕の病気は、大したことない…はず、なのに。

「君の腫瘍はかなり厄介な位置で、手術で取り出すのは無理なだけよ。きっと腕利きの良い医師なら手術も可能かもしれないが、危険も伴うのだ。助かる確率は…わずか十%だ」

「そんな…」急に目の前が真っ暗になつた。僕は一体、どうしたら良いのだろうか？

「そこで、君に相談があるのだが」「…何でしょう」僕はもう、何もかもが嫌になつた。だから何を言われても構わないと思った。

「君は、エレーナちゃんを助けたいとは思わないかね？」

「…はい？」僕は医師が何を言いたいのか分からなかつた。「どう言つことでしよう？」

「君は彼女にドナーが現れれば、彼女の手術が可能なのを知つてゐるだろう？」

だから君が死んだ後、君の心臓を彼女に移植できるんだ」

そうなのか…僕が死ねばエレーナは助かる。エレーナに未来を築く

チャンスが与えられる…。

「まあ考えてみたおくれ。まだ君の命に、希望が無い訳ではないのだから」

「分かりました」そう口では言っていたものの、僕の心はただ一つに決まっていた。僕は医師にこう言つた。

殺してくれ、と。

彼女を、救ってくれ、と。

「僕を殺して下さい。エレーナが助かるのなら」

「また、随分と」決断の早いことだが…ちゃんと考えて、言つていののかね?」「はい」「君の命に関わる、重要な案件だぞ」医師は何度も聞いた。

まるで、僕の意志を確かめるように。

「それを承知の上で、僕は身を投げるつもりです。しかし条件があります」

「条件、とは?」「まず眼球をベンに、胃をティアナに、腸をビリーに、両腕をメアリーに、両足をカナリアに、そして皆、この病院の患者である子供の名前だった。そして。

「…そして心臓を、エレーナにあげて下さい」

「…後悔はないかね?」医者が問う。

「はい。僕にはもう、何もありません。家族や友人は皆、僕の病気から逃げた。僕と一緒に現実と戦つてくれなかつた」
僕は、ぽつりぽつりと話し始めた。

「でも彼女達はいつも、僕の傍に居てくれたんです。皆に恩返しがしたい、出来ることなら。でも僕には何も出来ない。だからせめて、彼女達に明るい希望を、夢を与えてあげたいんです。この病院の患者さんに、笑顔を。

後、僕の臓器の中で使えそうなパートは全て、他の病院の患者さんにも提供して下さい。僕一人の犠牲で、エレーナが、皆が幸せになれるのなら

そうだ、自分が言つたんぢやないか。

希望は絶望の裏側にあるのだと。

エレーナを助ける代わりに、自分の命を差し出すと。

しばらく考えてから、医師は言った。「分かった。では皆の手術が終わるまで延命器具を使おう。

死ぬのは、それを全て見届けてからの方が良いだろ?」「ありがとうございます、本当に…」

やつた…これで、エレーナは助かるんだ。
ずっと、夢見てたこと。

それは、僕の生命^{いのち}と引き換えにして。

僕が、彼女を助けるんだ。

その意志が変わらない内に、僕は部屋に戻った。彼女にあるものを残すために…。

一人の知らない話（前書き）

リーシャが病室に戻った後の、医師とローザの会話です。
エレーナは勿論、リーシャもこの事実は知りません。

一人の知らない話

「先生、いくら何でも酷過ぎませんか?」ローザは言った。

「…何がかね?」「彼が助かる確率が低いなんて、嘘です」医師が聞き返す言葉に、ローザははつきりと言った。

「確かに腫瘍の位置は悪いかもしません しかし、腫瘍そのものは小さいのですよ?」

「分かつていい。しかし確実に、上手く行く保障は出来ない」

「彼はまだ若いんです。術後の回復力も大いに期待出来ます。仮に手術の成功率が低かつたとしても、…私達に彼の命を奪う権利はありません」これは一般論とも思えるが、むしろローザの個人的な意見にも聞こえた。

「確かに、そうかもしけんが…」医師はコーヒーを飲んでから言葉を続けた。「しかし彼女を始めとする多くの子供達に臓器を与えてあげれば、より多くの命が助かるとは思わんかね?大を救うには小を切り捨てるしかないのだ」「そんなの、おかしいです」ローザは反発した。「彼が居なくなつたら、悲しむ人がいるじゃないですか」

「リーシャ君とエーラーナちゃんには悪いが、これは仕方のないことなのだよ。それに、この病院から多くの子供達の笑顔を失いたくない…」

医師の言葉に何も言い返せず、ただ黙っていることしかできないローザだった。

葛藤と、生命(いのち)の選択

決意をして、部屋に戻った。つもりだった。

しかし。

彼女の、その笑顔を見ていると。

やはり、気持ちが揺らいでしまう。

「リーシャ、今日は何して過ごす?」
明るい問いに、上手く答えられない。

平凡で、それでも幸せな日常に、僕の“生きたい”と言つ欲望は引き戻されてしまいそうだ。

「うん…そうだね。新聞でも読んで、『死んでいいよ』」「まあ!」彼女は驚きの声を上げた。「なんて不健康で贅沢な時間の使い方かしら」

「仕方ないじゃないか。結局、僕達は病人なんだから」

言いながら、気付いた。

そうだ、僕達は病人。

治らなければ、一生、病室で暮らすことになる。

それは楽しいこともしれない。

…けど、それは“死”と同じではないか?

医師の提示した“死”を、受け入れるべきか否か。

少年の心の葛藤は、その夜、一晩続いた。

”僕が生きるか死ぬか”では、気持ちが揺らぎそうだった。だから、問いを掏り替えることにする。

”生き永らえるべきは、僕か、彼女か”

うん。これなら迷わずに、僕は死を受け入れることが出来る。ついでに、他の臓器で彼女以外の病人も助かると言つオプション付きだ。

でも、本当にこれで良いのだろうか。

悩む。この判断が正しいのかどうかは、正直誰も、分からない。

けど、確かに一つ分かるのは。

僕は彼女を失えば、生きる希望を無くすだろう。

彼女が僕を失つても、

叶えるための”夢”は残る。

…別に、取り残された後の孤独を味わいたくない、とか、逃げの姿勢を取る訳ではないが。

「僕の”夢”か…」

月明かりだけが差し込む深夜の暗い病室で、一人呟く。

静寂の中には、微かにエレーナの寝息が混じっていた。

”夢”、と言われば。

決して叶うことのない”夢”が、一つだけある。

それは。

彼女と、エレーナと共に生きること。

そりゃあ、ねえ。

共に生きていきたい。一緒に人生を歩んで行きたい。

…心から、そう思う。

しかし彼女の笑顔をこの世に遺すためなら、仕方ないとも思えるのだ。

例え代償が、あまりにも大き過ぎる物だとしても。

「やつぱり…僕が死のう」
僕以外、誰も起きていない病室で、今のところ僕しか知らない未来
が決まる。

「エレーナ。君は、僕の分まで 幸せに生きて」

歯車は全て嵌まった。

後は、時間が回してくれる。

誰も止めてはくれない。
いや、止められない。

止まってくれない歯車の運命に乗せられて、僕は死ぬんだ。

それなら…恐怖を感じずに行く。

きちんと覚悟を決める時間だけを得て、僕は死ぬことが出来るだろ
う。

生命(このひ)の果て

医師から相談を受けた次の日、僕は改めて承諾した。

もう後戻りは出来ない。

そう自分に言い聞かせ、覚悟を決めさせるためなのか。
無意識の内に、恐れをなしているのだろうか。

…でも、良い。

彼女が笑顔で、生きていてくれるなら。

「ねえねえ、リーシャー！」その夜、エレーナが検査室から戻つてくるなり大声で叫んだ。

「私、手術受けられるんだよー」彼女の嬉しそうな声。

分かつてたよ、エレーナ。だつてドナーは僕なのだから。

なんて、そんな言葉を言えるはずがない。

彼女を傷付け、泣き喚かせ、挙げ句の果てに”手術を受けない”等
と言ふ兼ねないからだ。

だから僕は、精一杯驚いて見せた。「それは本當かい？僕の頬を叩いてみてくれない？」

「それより、もつと良いことしてあげる」やつ言つて彼女は僕の頬にキスした。

僕は、目をしばたかせた。

「…」それでもまだ、信じられない?」はにかんで、彼女は言った。

僕は言ひ。『いや、信じたよ』

ああ、やつと信じられた。この世界の終わりって奴を。

君の唇の温度とは真逆の、重たく冷たくのしかかる…ビリしても逃れられない現実って奴を。

「良かった、君はやつと退院できるね」それが、君の”夢”。君と僕の、”夢”だから。

「うん!嬉しい。…でも、リーシャも早く体治してね」彼女は笑う。笑つて言ひ。

その問いに、その笑顔に何と答えれば良いのか分からなかつた。しかし返事をしないとかえつて怪しまれる。

迷つた挙げ句に、僕は。

「…ああ」としか答えられなかつた。

僕の生きた、最期の日

僕はあの日、そう 運命が変わったあの日。

死を覚悟し、躊躇して。

決意した、あの日。

出来なかつたこと。

彼女への”ある贈り物”を、彼女の居ない隙に隠すこと。

あの日は意志が揺らいだこともあり、出来なかつた。

だが、今はもう 摺らがない。

だから僕は、あの日出来なかつた贈り物を病室に残した。

そして手術の日々が過ぎ、僕は臓器を取られていった。

エレーナに不審に思われないようにするのは凄く苦労したが、何とか時は過ぎていった。

そして最後の手術。

エレーナへの心臓移植だった。

バチスタ手術は無事に終わり、退院可能な子供が増えた。

皆笑顔で。

僕は卑怯者だ。

エレーナは僕を失つと言つのに、僕は先に死んでしまうのだから。

そ、僕は全てを失う訳ではないの。
彼女と僕の”夢”は、叶つと言つのこと。

Hレーナが退院する前日、僕はこの世との繋がりを完全に絶つた。

「本当に、もう悔いはないのかね？」医師は問つ。

「ええ、もう十分です。今までありがとうございました」「その言葉が、医師への返事が僕の最後に残した言葉だった。

バツン、と何かが切れる音がした。

心電図の一疋なピーツと言つ音をBGMに、僕の意識は無くなつていぐ。

ふとHレーナの顔が浮かんだ。
楽しそうに笑う顔。
哀しげな顔。
怒った顔。
幸せそうな顔。
照れてはにかむ顔。

…沢山の、出会いから今までのHレーナの顔。

ねえ、Hレーナ。

君は今、どんな顔をしているだろう？

死者からの手紙

リーシャが死んで、悲しんでくれるのは病院にいた人々だけだった。前からよそよそしい様子を見せていた家族は、どうやら知っていたのだろう。

リーシャが、助からないことを。

だから、冷めた目で……いや、知っていたからこそ、”彼が死ぬ”ことに関して心の準備が出来ていたのだろう。

一方、医師から何も聞かされていないエレーナは、涙を浮かべるローザの胸の中で泣いた。まるで全てを失ったかのように。

退院したエレーナはリーシャの病室の荷物を片付けていた。結局、彼の遺族は病院に訪れなかつたからだ。

通夜は葬式は開いてくれたものの、遺品すら取りに来ないとは。

思つたが、仕方ない。

それに、私も彼の妻。最期まで傍に、同じ病室にいたんだし。と言つて、嫌がることなく片付けを受けた。

と、その時、

「あら？」分厚い封筒を見つけた。そこには”愛するエレーナへ”とあった。

彼女は慌てて封を切った。

中には銀色のペンダントと手紙が入っていた。

ペンダントは私達がお揃いで買ったものだ。彼女の胸の上では、哀しげにピンク色のペンダントが揺れる。

同じ愛の形でも、隣にいることすら出来ない。

” ペンダントは一旦封筒に戻し、彼女は手紙を読んでみることにした。
” ハレーナ、君がこの手紙を読む頃には僕はもう、生きてはいない
のだろう。

この世に生きることはとても楽しく、そして辛いことだった。しかし君に出会えていなければ、僕は自分の存在価値を見出だせなかつただろう。

僕は沢山のことを君から教えて貰った。だから今度は僕が君に未来へのチャンスを『えよう。

僕のためを思ひながら、その命を自分の納得いく使い方をして欲しいんだ。

大丈夫、君ならきっと出来る。君の夢を叶えるために頑張っておくれ。

そしてこのペンダントは僕達の象徴だ。いつまでも一人が一緒にいられるように。

”

彼女は泣きながら、手紙を読み返した。何度も何度も。

そして彼女は思った。このどうしようもない気持ちを、一体何にぶつければ良いの？

この後の行動一つで彼女の運命は変わる。

それは神の悪戯に導かれて……。

死者からの手紙（後書き）

この後、二パターンの終わり方があります。
．．．
いえ、ありました。

友人の何の氣無しに呟いた、ふざけた発言を具現化してみよつかな
と。
そうすると、終わりは三パターンとなりますね。

ただ．．．その三パターンはちょっと．．．あまりにも今までの
設定と、登場人物のキャラが食い違ひ過ぎていて．．。
だから”もし、この人達が患者だったら、こんな終わり方も有り得
るよね？”って、仮定の上で読んで下さい。

先に言つておきます。

．．．実際は、こんなキャラじやなかつた。

ではでは、ラスト三つをお楽しみ下さい。

end · i 愛(前書き)

PVが200を超えたました . . .

感謝、感謝です!!

それでは、まずは一パターン田をお楽しみ下さい。

彼女はベッドに突っ伏して泣いていた。

愛する彼が病気で死んだ。

ああ、もう一度と聞くことの無い彼の声。

彼はせめて手紙という形で、何かを伝えようとしているのだらう。

だがそれは完全に読み解くことは出来なかつた。

リーシャは自分に手紙を残してくれたのに、何故彼が死んだのかまでは分からなかつた。

頭の中に叩き込まれた”病死”と言つ情報を、彼女は疑う余地もない。

その時ローザがエレーナを訪れた。「エレーナちゃん
「何?」「エレーナちゃんに伝えなきやいけないことがあるの」

彼女は話し始めた。リーシャが彼女に残した言葉を。

「”ペンダントはお守りのつもりだつた。

君がもし一人で淋しいのならそれを見て、君には僕がついていふことを感じて欲しかつた。

でもそれは間違つていたのかもしれない。

「もし君がいつか、誰かを愛する日が来たらその時は僕を忘れて欲しい”つて。それと”手紙の内容は気にしないで”とも言つっていたわ。

その手紙を捨てる前に、それが出来なくなつたからそう言い残したみたいね」

「そう…分かつた」でも彼女は、リーシャの他に誰も愛せないと思つた。

それから彼女は努力を重ね、科学者としての夢を叶える。彼女が発表した論文のお陰で、沢山の人々の命が助かつた。

しかし彼女は本当の幸せを掴めなかつた。

その中に不幸という痛みと苦しみを抱えていた。

「せめて、子供がいたら良かつたんだけどね…」

何故か、出来なかつた。

これもまた、神の啓示か。

リーシャが自らの生命^{いのち}を絶つたことに対する戒めだとは、彼女は気付いていない。

そして最後に彼女は、一人寂しい人生を終えた。
生命^{いのち}の重さと強さを知り、その渦に飲み込まれて。

end · i 愛(後書き)

あの・・・十分暗い終わり方にも見えますが。

これでも、まだマシな方なんです。・・・すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585y/>

生命の果てに

2011年12月12日07時45分発行